

特集

ニセモノの創造力



どうする？ ホンモノ 神野 知恵

ニセモノとホンモノが反転するとき ハナムラ チカヒロ

リファービッシュ品を売って儲けよう 小川 さやか

放浪のペテン師たちと偽マンドラゴラ 山中 由里子

アンデス考古遺物の、ホンモノってなんだろう？ 松本 雄一



目次

- 1 エッセイ 千字文
むしろホンモノ特集を
木下 直之

特集 ニセモノの創造力

- 2 どうする？ ホンモノ
神野 知恵
- 4 ニセモノとホンモノが反転するとき
ハナムラ チカヒコ
- 6 リファービッシュ品を売って儲けよう
小川 さやか
- 8 放浪のペテン師たちと
偽マンドラゴラ
山中 由里子
- 9 アンデス考古遺物の、ホンモノって
なんだろう？
松本 雄一

- 10 みんぱく回遊
中国地域の文化展示における
あらたな「動き」
奈良 雅史

- 12 みんぱくインフォメーション

- 14 ○○してみました世界のフィールド
再会——4年ぶりのスリランカ
中村 紗絵

- 16 コレクションあれこれ
パズールで標本資料を
クリックする!？
寺村 裕史

- 18 シネ倶楽部 M
文化は輪廻する
——「エンドロールのつづき」
菅瀬 晶子

- 20 ことばの迷い道
剛、彭、楨、平、婉
菅 豊

- 21 編集後記・次号の予告

表紙

AIアートプログラムによって生成された画像
(Generated by Husky Loves Japan
with Midjourney)

むしろホンモノ特集を

きのした
なおよき
木下 直之

「ニセモノ」について書くようにと依頼を受けた時、お断りしようと思った。「千字文」であろうと「万字文」であろうと、第一に、堂々巡りとなつて抜け出せなくなる。第二に、さんさん、というほどではないにせよ、この問題についてはこれまでに何度も書いてきたからだ。

民博で特別展「異文化へのまなざし」が開かれた一九九七年以前から、今は博物館の館長を務める吉田憲司さんと今は美術館の館長を務める私はある問題を共有しており、同じ人工物が博物館では「資料」とされ美術館では「作品」とされるという吉田さんの指摘を受けて、私は「作品」とは何かを考えてきた。美術館の世界では神聖不可侵な「作品」という言葉の登場は意外と新しく、二〇世紀に入るところで、それまでは美術でも文学

でも芝居でも「作物」が使われた。

「作物」は「さくぶつ」、「さくもつ」、「つくりもの」と読んだ。もつぱら私は、祭礼や見世物で、その場限りの仮設的な造形表現が「つくりもの」と呼ばれたことを面白がり、追いかけてきた。その対極に「作品」が登場し、みるみるうちに日本社会に普及するのは、美術の世界では、美術館の登場と軌を一にしている。美術館は恒久的な造形表現を相手にし、後世に伝えることを使命とし、それゆえに劣化を恐れ、温湿度をコントロールし、収蔵庫を用意し、修復家を配置する。そうした物理的な保存に加えて、もうひとつの重大な関心事が「真贋」である。扱うものは「真作」＝「ホンモノ」に限り、「贋作」は排除される。他方、「つくりもの」は「ニセモノ」に近接し（似

せもの」と書けばそのニュアンスがわかる）、「作物」から「作品」への交替劇の背景には強い「ホンモノ」志向がある。

では、誰がそれを「ホンモノ」と決めるのか。まずは作者であり、ついで美術館学芸員だ。すると「作者」とは誰なのかが、つきに問われなければならない。人工物である限り、かならず作り手はいるはずだが、神聖不可侵な「作品」の向こうには神聖不可侵な「作者」がいて、一対一の対応関係があるという信仰が強固に出来上がった。「作者」の指示さえあれば、たとえ本人の死後に鑄造された彫刻であっても「ホンモノ」とされる。完璧なコピーが実現可能な現代においては、むしろ、この「ホンモノ」という領域こそが怪しいのだから、『月刊みんぱく』はこちらを特集すべきだった。ほら、そろそろ泥沼から足が抜けなくなってきたので、このぐらいにして、あとは神野知恵さんの総論へとバトンを渡したい。

プロフィール

1954年浜松生まれ。兵庫県立近代美術館、東京大学総合研究博物館、東京大学大学院人文社会系研究科を経て静岡県立美術館館長。19世紀の日本文化を研究、いまは義足の可視化に関心あり。著書に『美術という見世物』（平凡社）、『わたしの城下町』（筑摩書房）、『股間若衆』（新潮社）、『銅像時代』（岩波書店）、『動物園巡礼』（東京大学出版会）など、2015年紫綬褒章。

ニセモノの創造力



どうする？ ホンモノ

かみのちえ 神野知恵

民博特任助教

「ニセモノ」と聞くと人はニヤッと笑みを浮かべて興味を示す偽物？ 偽者？ 似せもの？ 人間の知能の「似せもの」のはずのAIが「ホンモノ」まで作り始めたから、さあ大変！ 世界は、似せもの、ニセモノだらけ

「眼鏡をかけて洋服をきた12歳の日本人の少女が、美術館で複数の絵を眺めている、一眼レフで撮った写真」というプロンプト(指示書き)をもとにAIが生成した画像(Generated by Husky Loves Japan with Midjourney)

「まなぶ」は「まねぶ」 筆者は、伊勢大神楽の研究を通じてニセモノについて考えるようになった。彼らは今も獅子舞や曲芸を演じる旅の暮らしをしている。この仕事は家元である太夫家を中心に、四〇〇年以上前から継承されてきた。はじめて調査に入った日に、「ニセモノ」が先回りして荒稼ぎすることがあるという衝撃的な話を聞いた。迎える側の地域誌にも「みすぼらしい二人組を乞食獅子とよんで区別した」と書かれている。こうした団体が急増したため、家元は組合を作り、舞を複雑にして、自分たちの領域を守ってきた。しかし新規団体もそれに対応してどんどん巡行地域を拡大した。この文化はそうした攻防戦があったから生き残ったのかもしれない。無形文化の伝習において似せることは重要な手段であり、「まなぶ」とは「まねぶ」なのだ。伊勢大神楽についても、芸が模倣されて伝播したのだともいえるが、長年にわたり地域との関係を構築してきた家元にとって、自分たちの名を詐称する団体は、厄介な「ニセモノ」に他ならない。当事者にとっては深刻だが、筆者を含む外野は

この現象に興味津々だ。ニセモノへのまなざしには、どこか「ホンモノ」が握る権威や絶対的価値への懐疑が込められ、むしろそれこそが人間が秘めつつ底力への期待にちがいない。似せる能力

AI(人工知能)の躍進により、真贋についての価値観は急速に変化している。Chat GPTが生成した文章の真正性は学術界にとって重要な話題だ。じつは本誌の表紙もAIアートプログラム「Midjourney」によって生成された画像である。実在するホンモノに似せてAIがつくったイメージが、オリジナルを代替する水準にまで達している。AIはもともと既存のものを学習し、推測をおこなう人間の能力を模して作られた。本特集で紹介される「ニセモノ」の作り手たちは、AI的能力を有していたと

もいえるだろう。似せる能力さえ、AIに代替されようとしている今、ホンモノとニセモノの関係性はますます複雑化している。この終わりのなき論議に興味を失ったとき、人間は世界をどのように知覚するようになるのだろうか。本特集では、考古・歴史から現代まで、ニセモノにかかわる人びとの活動を見つめ、改めて真贋のねじれについて考える。



プリント布(筒形スカート) ろうけつ染めのパティックを模倣して作られた機械プリント布。おもに東南アジアやアフリカで出回っている(タイ、H0236589)



元宝(ユエンパオ)の模型 中国の古い銀貨の形。死者を葬る際にこれに似せた形に紙銭を折って燃やしたり、同様の形に餃子やフォーチュンクッキーを作って食べるなど、「似せ」は増殖する(日本【華僑】、H0275121)



平田一式飾 弁慶 自然素材や道具などを用いて人形や動物などに見立てた「つくりもの」の出来栄を、祭りの際などに競い合う。ニセモノのミセモノ?(島根県、H0269570)



紙銭 死者の弔いに紙銭を燃やして冥府に金を送る(マレーシア【華僑】、H0197919)



タコとり用擬餌 ネズミの形をした擬餌を浅瀬で上下させ、それをつかもうとするタコを捕獲する(ハワイ諸島、H0007395)



祈願用奉納物 身体の一部に病気などのある人が、その部位を模した「似せもの」を奉納する習慣は世界中にある(ブラジル、H0224641)



牛笛 歌舞伎など芝居で牛の鳴き声を出す擬音笛(日本、H0009578)



葉皿 不浄を嫌うインドで葉皿が使われてきたが、模造品の使い捨て紙皿も出回っている(インド、左:H0276170、右:H0276188)

溶け込むフェイク

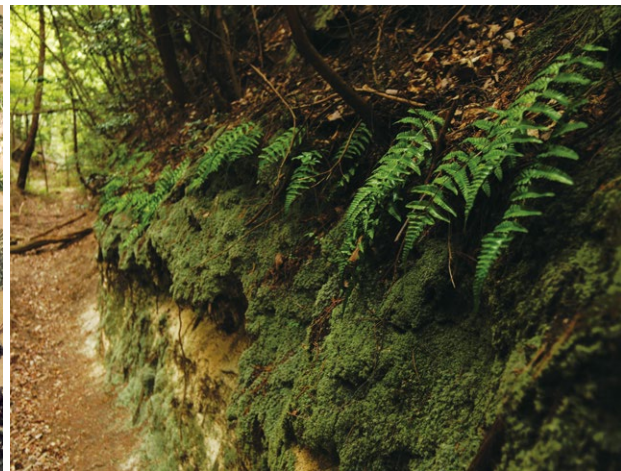
ホンモノとニセモノの境界線を巡って、ある芸術祭で空間美術の作品を作ったことがある。会場となった山林にはたくさん植物が生えており、その自然のなかにプラスチックでできた植物や造花を大量に紛れ込ませる作品だ。ニセモノの植物はホンモノと外見上は変わらないくらい精巧にできている。だから訪れた人はどれが作品なのか混乱する体験を得る。

もともと都市や屋外空間を設計するランドスケープデザインに携わる身としては、植物は厄介な素材でもある。維持管理には手間がかかるし、綺麗な時間は限られている。そう考えれば、もうここは造花でもいいのではないか……という誘惑に駆られることもある。しかし人はなぜかフェイクの植物では満足できないらしい。だから、もしホンモノの植物とニセモノの植物を隣に置いたら、その違いを明白に感じるので



どこからが作品でどこからがホンモノの植物かの区別は難しい(作品16:上昇/vine ladder、撮影:堀川高志、大阪府箕面市、2008年)

ンモノを生むともいえる。どちらも我々の想像力の産物であり、同じ対象物を違ったまなざしで眺めれば違った風景が生まれるだけにすぎない



周辺環境に溶け込むフェイクの植物(作品20:侵食/erosion、撮影:堀川高志、大阪府箕面市、2008年)



大量に用意したプラスチックの植物。シダやブドウなど多様な造花をそそえた(大阪府箕面市、2008年)

ニセモノとホンモノが反転するとき

ハナムラチカヒロ 大阪公立大学准教授

はないか。そんな単純な動機で作品を制作し始めたが、その予想は面白い方向に裏切られることになった。

鑑賞者は作品位置が示されたマップを手に展示を求めて山を巡り歩く。事前に作品の詳細は告げられず、現地に解説のサインもない。ただ植物に擬態したプラスチックがいかにも生えていそうな環境に差し込まれているだけだ。最初はそれらを発見できないが、鑑賞の途上に何かの拍子でニセモノの存在に気づいてしまつと、山の見方は一瞬で切り替わる。自分がこれまで眺めていた風景にニセモノがあったことを知ると、それ以降に見る山の風景すべてが怪しく見え始めるからだ。ホンモノの自然をニセモノのように眺め、ニセモノをホンモノのように眺めながら、次第にニセモノとホンモノの区別はなくなっていく。

信じること、信じさせること

ニセモノという概念は先に存在するホンモノに対して生まれるものではない。ニセモノが生まれた瞬間にホンモノという概念も同時に生まれるのだ。そうであれば、むしろニセモノがホ

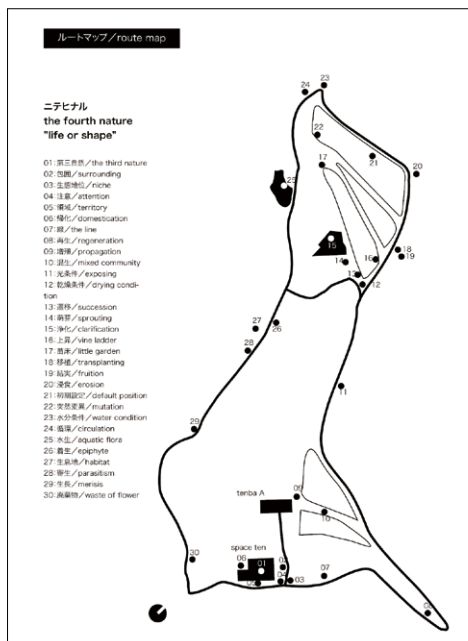
い。そんなモノの見方とそのデザイン手法について研究していると、実際の社会こそニセモノとホンモノの境界線が曖昧なことに気づいてしまつ。

我々は日々世界で起こるさまざまな出来事のニュースを目にする。例えばどこかの国で起こった爆撃、何かの商品の大ヒット、ある病原菌の猛威。いろんなことが世界で起きているが、そのほとんどは単なる「情報」でしかない。実際に確かめたわけでもなく、確かめようがないこともあり、多くの場合「信じる」しかない。そして多くの人が信じたことがホンモノになってしまう。だから信じさせることに成功するとニセモノもホンモノになるのだ。

ニュース、お金、評判……

昨今のSNSには「フェイクニュース」とよばれるものが急増し、それを信じる相当な数の人がいる。そしてその同じ情報を懐疑的に見る相当な数の人もいる。しかしそもそもフェイクかファクトかの区別をどう判断できるのだろうか。無数の出来事から何かの意図で選択することで情報が生まれるのなら、どのようなものであっても、すべての情報は最初から創作されているといえる。どの立場からどの事実をどのように切りとるので情報には主張が紛れ込む。それを報じ

そこに自然に生えていそうな装いで設置する(作品08:再生/regeneration、撮影:堀川高志、大阪府箕面市、2008年)



インスタレーション作品「ニテヒナル/the 4th Nature」の地図。山中の30カ所に設置した作品の位置を示している(作成者:ハナムラチカヒロ、2008年)

たのが政府機関や大手のメディアであれば、その情報はホンモノだとい切れるのだろうか。そもそもわたしたちの日常の約束事はほとんどニセモノだ。お金とよんでいるものは、長方形の紙や丸い金属、あるいは通帳の数字にすぎないのに、後生大事に取り扱う。誰かから浴びせられた罵声や称賛の声は、単なる音波でしかないのにそれに傷ついたり追い求めたりする。我々は必ず何かのフィルター越しに世界を眺めていて、ありのままに見ていない。そうであれば、何かを「ホンモノかどうか」と問うことすら意味を失うだろう。ホンモノとニセモノの境界線とは我々が考える以上に不明瞭で、ある意味ですべての物事はニセモノであり、本人にとってはホンモノなのだ。そして、それは我々のまなざしが変われば簡単に反転してしまうものなのである。

リファーマービッシュ品を売って儲けよう

おがわ 小川 さやか 立命館大学大学院教授

新品のスマホに使用ログ

香港の目抜き通りネイザンロードに建つ「チョンキンマンション（重慶大廈）」は、世界各地から取引人や亡命希望者、バックパッカーが集まる安宿が入った複合ビルである。同ビルの地階と一階には、南アジア料理店やアフリカ料理店、両替商や旅行代理店などに交じって南アジア系の携帯電話（以下、ケータイ）店が軒を連ねている。ケータイ店では移民や旅行者向



チョンキンマンションには世界各地からの移民が集まる（香港、2019年）

けのSIMカードの販売を前面に出しているが、スマートフォン（以下、スマホ）や、ストラップなどのアクセサリを小売りしたり、アフリカなど発展途上国の取引人やブローカーたちに数十単位でスマホを卸したりもしている。

二〇一七年のある日、わたしは、そのひとつのケータイ店でサムソンのスマホを購入し、様子がおかしいことに気づいた。新品のはずなのに一部のアプリが起動せず、誰かが使用したログが残っているのだ。コピー商品だと疑い、中国製ケータイを商うタンザニア取引人たちに購入したスマホを見せると、「これはコピーじゃない。リファーマービッシュ品だ」と説明された。リファーマービッシュ品とは、整備済み・再生品のことだ。

ケータイを仕入れにアフリカから中国へ

アフリカでケータイが猛スピードで普及し始めた二〇〇〇年代半ば、香港を経由して中国に携帯電話を仕入れに行くアフリカ系商人たちの目当ては、ノキアやサムソンなどのブランド品に非合法に似せた「ニセモノ」、すなわちコピースマホだった。二〇一〇年代には母国で売れ筋



ケータイの中古品は、リファーマービッシュされるものとレアメタルなどを取り出すものに仕分けられる（香港、2017年）

のブランドのスマホを携えて中国に渡航し、現地の工場に「このモデルのコピーを〇〇台」などと注文するアフリカ系商人が増加した。しかし二〇一〇年代半ばごろから、コピースマホの取引は下火になっていく。

その理由のひとつは、アフリカ諸国でコピー商品や海賊版商品の取り締まりが強化されたことにある。例えば、二〇一六年、タンザニアのモバイル通信規制局は、正規の国際携帯識別番号（IMEI）を持たないコピースマホに対する通信を強制的にシャットダウンした。また中国からコピースマホを輸入する商人たちの摘発も相次ぐようになった。

次に、中国企業のケータイが高機能化・高品質化したことで、ノキアやサムソン、アイフォンなどのコピーケータイの人气が落ちたこともその理由だ。例えば、日本では知られていないが、中国メーカー「トラシオン（伝音科技）」による三つのブランドTel、Tecno、Infinixは東アフリカのスマホ市場で七割弱のシェアを誇

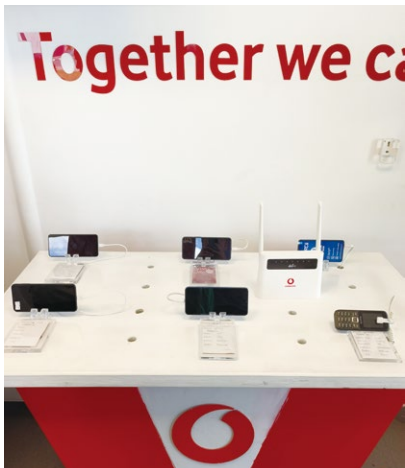
る。二〇一〇年代半ばはTecnoやInfinixは「手頃な価格で丈夫であり、電池の持ちもいいが、野暮ったく機能が低い」と言われていた。だが近年では、トラシオンのケータイはおしゃれで高機能かつ安価であり、しかもコピーと違ってホンモノのブランド品なので安心であるという評価に変化しつつある。

タンザニア商人たちの売るための知恵

こうした状況で、コピー商品に代わってアフリカ系商人たちが目を付けたのが、アイフォンやサムソンのリファーマービッシュ品である。リファーマービッシュ品には、メーカーが不良品などを回収して改装・修繕したものと、中国・香港のインフォーマル業者が中古品を集めて液晶画

面やハウジング（部品を覆う外枠）、電池などを交換し整備したものの両方があるが、アフリカ系商人たちが商うのは後者である。リファーマービッシュ品は正規品を整備したものでない。IMEI番号もあり、ニセモノではない。だがアフリカ系商人たちはこれを新品であると偽り、安い価格で売る。なかには見た目だけ新品で電池は古いままだったりするものもある。それどころかひとつ前のモデルの中古品に最新モデルのハウジングを付け替えて売る場合もある。「それじゃあ、ニセモノと同じく詐欺じゃないか」と言うと、タンザニア商人たちは澄ました顔で言う。

「かつて先進国の企業は中国製コピーを一掃したいと願った。今では中国企業が先進国ブラン



タンザニアのケータイ店には、サムソンとTecnoやInfinixのスマホが並んで飾られている（タンザニア、2022年）

ドのコピーだけでなく、中古品も一掃しようとしている。俺たちは落ち目のブランドの中古品をアフリカで売るために知恵を絞っている。それのどこがいけないんだ」。



香港の深水埗にはスマホの整備業者がたくさんいる（香港、2023年）



香港の深水埗で販売されているリファーマービッシュ・スマホ（香港、2023年）

放浪のペテン師たちと偽マンドラゴラ

山由里子 やまなか ゆりこ 民博教授

偽マンドラゴラの作り方

マンドラゴラは実在する。
現在マンドラゴラ・オフィキナルムという学名でよばれるナス科の植物は、古来、薬として珍重されるとともに、そのヒト型に見える根が人びとの想像力を刺激し、さまざまな伝承を生み出してきた。さらにその希少性は「擬き」の流通も促した。「薬草学の父」とさえよばれる古代ローマのディオスコリデスの『薬物誌』のイタリア語翻訳書・解説書を一五四四年に刊行したイタリアの医師マッティオリは、Ciumadori (術使い) や Ceretani (いかさま師)

が偽のマンドラゴラを売り歩いているので気を付けろ、と警告している。

マッティオリ自身がローマで性病を治療した Circonforanei (放浪の民) に、偽マンドラゴラの作り方を教えてもらったと証言している。その方法とは、ブリオニアなどの根に切り込みを入れてヒト型にし、大麦の種をその根に埋め込んでそこから生えてくる細かい根が体毛に見えるように細工し、土に埋めなおして、あたかも自然に育った人間植物に見えてくる頃合いに掘り起こす、というものであった。こうして採取された擬きは、ヨーロッパ各地で、もつともらしい口上を信じる人びとに高値で売りさばかれた。

移動民の驚異的ニッチ産業

一六世紀以降のヨーロッパの医学書や博物誌が記録しているマンドラゴラ擬きの生産と流通の源流には、じつは中世イスラーム世界のパヌー・サーサーン (サーサーンの末裔) とよばれた放浪の詐欺師・物乞い集団のいかさま商売がある。一三世紀のアラビア語文献に登場す



サンマルコ広場で大道芸をするいかさま師たち (出典: ジャコモ・フランコ『ヴェネチアの男女の衣服』1614年刊, gallica.bnf.fr/ BnF)

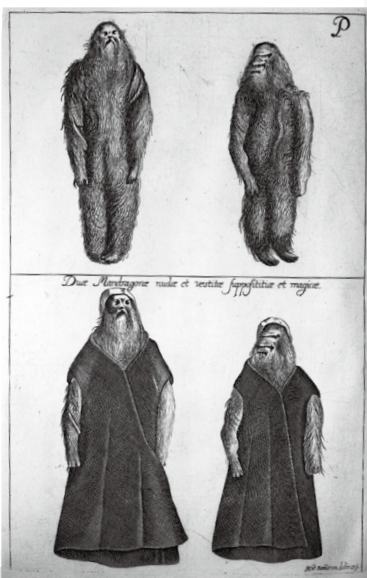
るパヌー・サーサーンによる偽マンドラゴラ売りの記録と近世ヨーロッパの証言とのあいだには、偶然とはいえない共通点が多いのである。

詳細は省くが、いわゆるロマとよばれる移動民族が、北アフリカや中東からヨーロッパに移動していったことと関係があるとわたしは考えている。そこには、自然を巧みに加工する技術と、このヒト型植物の不思議なパワーを信じたいという民衆心理に付け込む商売を、中東とヨーロッパを跨いださまざまな地域において数世紀にわたって継承し続けた、したたかな移動民の驚異的に持続的なニッチ産業が見えてくるのである。



マンドラゴラ(メス) (出典: マッティオリ『ディオスコリデス薬物誌』1568年版)

神聖ローマ皇帝ルドルフ二世(1552~1612年)が所蔵していたとされる雌雄のマンドラゴラ (出典: D. ネッセル『ウィーン王立図書館蔵書目録』1690年, http://data.onb.ac.at/rep/103935F3)



アンデス考古遺物の、ホンモノってなんだろう？

松本雄一 まつもと ゆういち 民博准教授

レプリカの合法性

古代アンデス文明の中心地であったペルー共和国では、一九六〇〜七〇年代にかけて大規模な盗掘が横行し、数多くの文化財が他国に流出した。その後、一九七〇年に採掘されたユネス



上: ペルー北高地、クントゥル・ワシ遺跡から出土した鳥形赤色鍍型壺のオリジナル。紀元前850〜550年ごろ製作。割れた状態で出土した土器が接合されている (撮影: アルバロ・ウエマツ, 2012年) ©クントゥル・ワシ調査団



下: 鳥形赤色鍍型壺のレプリカ。表面にはレプリカであることが明記されている (撮影: 山本睦, 2023年)

コの文化財不法輸出入等禁止条約以降、ペルーや欧米を含む各国で法整備が進むにつれてそれまでのような大規模な盗掘は少なくなったが、今度は大量の贗作(贗作)が製作されるようになった。

ここでニセモノ(贗作)とレプリカ(複製)の関係を考えてみよう。博物館においてレプリカの展示はごく普通におこなわれる。しかし、ここではレプリカであることが観覧者に明確にわかるように示されている。ただし、両者の境目はうづろいやすいものでもある。ペルーにおいては、土器のレプリカはポピュラーな土産物であるが、レプリカであることを明示することが義務付けられている。しかし、レプリカを買い取った仲買人が、上手に書かれた(あるいは刻まれた)文字を紙やすりで消してホンモノとして売り出すことも多かったようだ。つまり、合法的なレプリカはニセモノへと変貌を遂げるのである。

ニセモノ vs 専門家

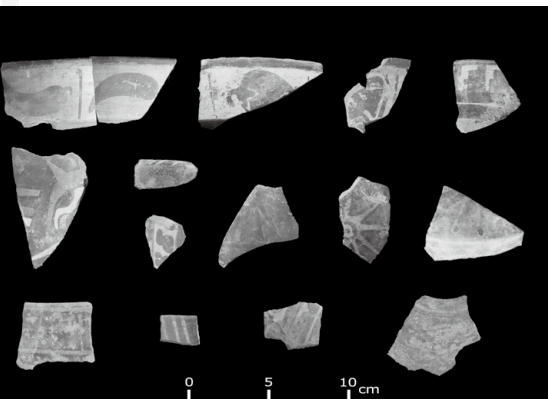
さらに厄介なのは、ホンモノとニセモノの境界に関する事例である。よく聞く話として、盗掘によって割れた一つの土器の破片を二分する

ことで、修復で用いられる技術により、ニセモノを二つ作る方法がある。失われた部分がある出土品を提示する場合、石膏などで隙間を埋めて全体の形を修復により再現することが多い。本来は修復した部分が明確にわかるようにすべきなのだが、そこにオリジナルと同じ色を塗って外見上の区別を困難にすることもできる。この技術を用いて、一つの破片から二つの個体を復元して売りに出すことができるのだ。

しかも実態はさらに複雑らしい。遺跡で採取した別個体に属する土器片を複数埋め込んで、あらたな個体に仕立て上げる「名人」がいるという。博物館での観察を通じて、さまざまな土器の文様や図像を記憶した「名人」は、破片と破片の空間に自分でそれらしい図像を描いて、専門家が見ても違和感がないほどの土器を作り上げることができると言える。

こういったものが自分の目の前にあらわれたとき、その実態を見抜けるであろうか。自信がないというのが正直なところである。

遺跡表面に散らばっていた土器片。このような破片をいくつか組み合わせて完形の土器に仕立て上げる「名人」がいるという(2014年)



民博には、映像や音声の流れが流れていたり、展示に関する情報をさらに詳しく調べるための端末が設置されていたりする展示場も少なくない。それらに比べると、中国地域の文化展示場（以下、中国地域展示）は静かで、インタラクティブな展示も少なかった。そこで二〇二二年度、わたしたちはそこに以下のような単に展示物を見るだけではない「動き」を加えるべく、部分的にリニューアルをおこなった。

近づく

民博では、保存上の問題がない展示資料に關しては、基本的にケースで覆わない露出展示を実施してきた。ただ、これまでの中国地域展示には、ケースやガラスパーテーションによって展示資料に近づくことができない箇所も少なくなかった。例えば、「台湾原住民民族」セクションには、精巧な民族衣装が展示されているにもかかわらず、それらの細部を観察することが困難であった。そこで展示の一部でそれらを撤去し、展示資料をより間近で観察できるようにした。「台湾原住民民族」セクションでは、あらたに収集したシラヤ族女性およびブヌン族男性の民族衣装を展示するとともに、展示スペースを工夫することで、それらに近づくことができるようになった。間近で観察することでその精巧な作りから台湾原住民の文化的豊かさを感じとることができるはずだ。



A 展示資料との距離が近くなった「台湾原住民民族」セクション。左から2体目がシラヤ族の女性、3体目がブヌン族の男性の衣装（2023年）

ンでは、わたしたちを取り巻くさまざまな音を風景としてとらえる「サウンドスケープ」の考えを取り入れてあらたな要素を加えた。実際の住居での生活を撮影した映像民族誌から、住人たちが食材を切り、それらを炒めて料理をしたり、歓談しながら食事をしたりする住居内での日常生活の音を取り出して、「高床式住居」内で流すようにした。音を含めた現地に近い環境に身を置くことで、チワン族たちの日常生活の一端に触れることができるだろう。

調べる

今回のリニューアルでは展示資料の現地での使用状況を提示するだけでなく、それを含めた現地の情報を調べることができる仕掛けも導入した。「宗教と文字」セクションには、

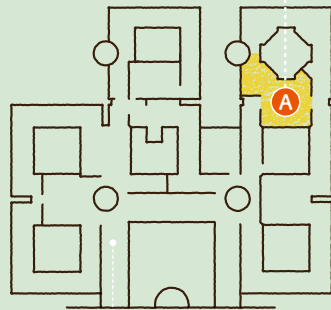


A 礼拝用敷物（携帯用）（H0268234）



携帯用敷物を用いて礼拝をするムスリムたち（中国浙江省義烏市、2017年）

中国地域の文化展示



観覧券売場
本館展示場



A 持入れと内容物（H0064742）



A 持入れを首からさげたチベット族の男性用衣装（H0148297ほか）

「動き」 中国地域の文化展示 におけるあらたな

みんぱく回遊

奈良 雅史
民博 准教授

知る

さらに、展示資料が現地でのように使われているかを示すために、いくつかの要素を加えた。例えば、「生業」セクションでは、鵜飼いで使用される双胴船のそばに、現地での鵜飼いの様子を撮影した映像を流すためのモニターを設置した。ここではバイクに双胴船を載せて漁に向かう様子や実際に双胴船を使っている様子に加えて、

鵜を繁殖させる中国特有の技術について知ることができる。また、高床式住居とよばれる建築の二階部分を再現した「チワン族の高床式住居」セクション

タツチパネルを設置し、展示場では十分に紹介できていない、現地における宗教施設や現在の宗教的な状況などについて調べられるようにした。例えば、展示されている携帯用のイスラームの礼拝用敷物がどのような状況で使用されているのかを知ることができる。他にも、展示されているナシ族の経典に使用されているトンパ文字が、観光においてお土産品として利用されたり、現地の小学校においてナシ族文化を学ぶために活用されたりしている状況を調べることも可能だ。

発見する

中国地域展示は、広大な面積と多様な自然環境で育まれてきた民族文化を、その歴史や地域性を踏まえ、九つのセクションで紹介している。今回のリニューアルは、そのうち六つで実施した。ここで紹介したのはその一部にすぎない。リニューアルを経た中国地域展示ではわたしたちが必ずしも意図していない展示資料どうしのつながりが見つかるかもしれない。

あらたに設置した「チベットの護符」コーナーでは、版画で作られる護符の制作プロセスとそれが含まれる持入れの中身を展示している。後になってわかったことなのだが、「装い」セクションで展示されているチベット族の民族衣装には持入れが含まれていた。新しくなった中国地域展示にはこうした思いがけない発見が溢れているはずだ。



A あらたに設置した「チベットの護符」コーナー（2023年）

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

特別展

「交感する神と人
—ヒンドゥー神像の世界」

会期 12月5日(火)まで
会場 特別展示館

企画展

「カナダ北西海岸先住民の
アート—スクリーン版画の世界」

会期 12月12日(火)まで
会場 本館企画展示場

◆関連イベント

「スクリーン版画に挑戦」

日時 11月25日(土)13時～15時50分
(受付12時30分)

会場 本館2階第3セミナー室、
本館展示場(定員15名)

講師 岸上伸啓(本館教授)

対象 小学生以上(小学3年生以下
は保護者同伴)

※制作には刃物(カッターナイ
フ)を使用します。



イベント予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>

各イベントについて、
詳しくは本館ホームページをご覧ください。

参加費 500円(大学生、一般の参
加者は要展示観覧券)

※事前申込制(定員に達し次第受付終
了)、先着順

みんなく オッタ カムイノミ
(みんなくでのカムイノミ)

本館に所蔵されている資料への安全な
保管と後世への確実な伝承のため、北
海道アイヌ協会の協力をえて、折りの
儀式(カムイノミ)をおこないます。

日時 11月30日(木)10時30分～11時
50分

会場 本館前庭 1階エントランス
ホール

※申込不要、参加無料

みんなくミュージアムパートナーズ
(MMP)のワークショップ

「点字体験ワークショップ」

日時 11月11日(土)、12月9日(土)
12時～15時30分

公開講演会

「依存するヒト
—民族・国家・嗜好品」

日時 11月10日(金)18時30分～20時
40分(17時30分開場)

会場 日経ホール(東京)
(定員600名)

趣旨説明 野林厚志(本館教授)

講演 松本俊彦(国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究セン
ター 精神保健研究所薬物依存
研究部 部長、薬物依存症セン
ター センター長)

平野智佳子(本館 助教)

パネルディスカッション
松本俊彦、平野智佳子、野林
厚志

主催 国立民族学博物館
日本経済新聞社

【申込期間】 11月1日(水)まで

※事前申込制、先着順、参加無料

※オンライン(ライブ配信)でも参加
いただけます。

※手話通訳あり

お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係

06-6878-18209

無料観覧日

11月18日(土)、19日(日)は、「関西文
化の日」として本館展示を無料で観覧
いただけます。なお、特別展の観覧は
有料となりますのでご注意ください。

受賞

本館の関雄二名誉教授が、ベルー共和
国議会、通商観光委員会より、アンデ
ス・アマゾン の考古学調査および、カ
ハマルカ州チヨタ郡に位置する「コパン
バ遺跡の文化財の保存と活用における
顕著な貢献に対して表彰されました。

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)

※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第539回

11月18日(土)13時30分～15時(13時開場)

北アメリカ北西海岸地域の
先住民アート

—シルクスクリーン版画を中心に

講師 岸上伸啓(本館 教授)

【申込期間】

■一般受付 11月15日(水)まで

※友の会先行受付は終了しました。

第540回

12月16日(土)13時30分～15時(13時開場)

「友よ、水になれ」

※申込不要、要展示観覧券(イベント参加
費は不要)

11月5日(日)14時30分～15時15分

神がみとかかわる方法あれこれ

話者 三尾稔(本館 教授)

11月12日(日)14時30分～15時

戦前期日本でつくられた

「ヒンズー神像」の足跡をたどる

話者 豊山亜希(近畿大学 准教授)

上羽陽子(本館 准教授)

11月19日(日)14時30分～15時15分

人と神とをつなぐ刺繍布

—戸口飾り布トローン

話者 上羽陽子(本館 准教授)

11月26日(日)14時30分～15時

カナダ北西海岸と

アメリカ南西部の金属細工

話者 伊藤教規(本館 准教授)

【最終受付15時】
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「陽気な墓」で
想い出を残そう2023」

日時 11月3日(金・祝)
11時～12時、13時～14時、14
時30分～15時30分(受付は各回
開始15分前から)

会場 本館1階エントランスホール
(各回定員8名)

対象 年齢制限なし(4歳以下は保護
者同伴)

※申込不要、参加無料(要展示観覧
券)、当日受付(先着順)

◆特別展関連ワークショップ

「神様を飾る」を体験しよ
う！」

日時 11月19日(日)10時～16時
(最終受付15時30分)

会場 本館1階エントランスホール
(同時着席最大14名)

対象 年齢制限なし
(未就学児は保護者同伴)

※ハサミを使う体験は4歳以上から
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「はじめの1歩
やってみよう！ミラー刺繍」

日時 11月4日(土)、11日(土)、18日
(土)、25日(土)、12月2日(土)

会場 本館1階エントランスホール
(最終受付15時30分)

対象 6歳以上
(5歳以下は保護者同伴)

※申込不要、参加無料、当日随時受付

「絵本の読み聞かせを
楽しもう」

日時 11月19日(日)
11時～11時30分、13時～13時
30分、14時30分～15時

会場 本館1階エントランスホール
(各回定員30名)

※申込不要、参加無料、当日受付先
着順)

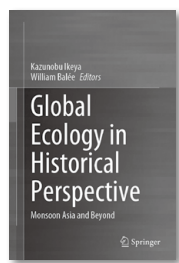
共催展
九州山地の焼畑文化」

会期 12月3日(日)まで
会場 ヒストリアテラス五木谷
(五木村歴史文化交流館)
(熊本県五木村)

主催 ヒストリアテラス五木谷
国立民族学博物館

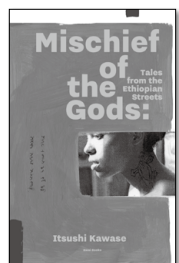
刊行物紹介

■Kazunobu Ikeya and William Balée 編
*Global Ecology in
Historical Perspective:
Monsoon Asia and Beyond*
Springer Nature Singapore Pte Ltd.
※価格については販売元でご確認ください。



本書では、日本のイノシシ飼育やクマによる
獣害、中国の鵜飼、タイのバンブー利用など、
モンスーンアジアにおける人と生き物との関
係が歴史生態学(生態史)の視点から明らか
にされている。希少種や生息地の維持など、
地球と文明との関係を考える上でヒントを
与えてくれる。

■Itsushi Kawase 著
Jeffrey Johnson 翻訳
*Mischief of the Gods: Tales
from the Ethiopian Streets*
Awai Books
※価格については販売元でご確認ください。



エチオピアのストリートに生きる人々との交
流を綴った「ストリートの精霊たち」(川瀬悠、
2018年、世界思想社、第6回鉄犬ヘテロト
ピア文学賞受賞)の英訳版。

■広瀬浩二郎、相良啓子 著
『「よく見る人」と「よく聴く人」
—共生のための
コミュニケーション手法』
岩波書店 1,034円(税込)



目が見えない研究者と耳が聞こえない研究者
の対話。手話や点字など様々な「工夫」を積み
重ねて他者とながら、世界を広げてきた二
人が、多様な人々が互いに理解しあうための
コミュニケーションの可能性を伝える。

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>

友の会
お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会
参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円

※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第542回 11月4日(土)13時30分～15時
有明海のウナギから考える、
生態系の未来
講師 久保正敏(『季刊民族学』編集長、
本館 名誉教授)

わたしは中尾勲氏による『季刊民族学』
(163号、166号)の寄稿に触発され、ウナギ
が水辺生態系の指標だと知り、水辺の自然
保全の重要性を学び、一冊の本を上梓しま
した。山から海に至る河川流域での資源の
循環に基づく、持続可能な地域社会を目指
して、いくつかの地域で実験が始まってい
ます。本講演では淀川流域で進む、天然ウ
ナギ復活をねらった植林運動も紹介します。

第543回 12月2日(土)13時30分～15時
【特別展「交感する神と人
—ヒンドゥー神像の世界」関連】
ヒンドゥー神像の美と信仰
—飾りつけをめぐる—
講師 福内千絵
(大阪芸術大学 非常勤講師)

ひろく信仰の場において、礼拝像に対する
「飾りつけ」の行為はみられます。ヒンドゥー
教の信仰実践においても、神像への飾りつ

けは重要な一角を占めています。しばしば過
剰に感じられるほど華やかに、そして香しく
施される装飾。本講演では、祭礼時の神像
装飾の具体例を紹介し、香りの体験を交え
ながら、飾りつけが喚起する美と神と人の
関係に迫ります。

オンラインサロン
中牧理事長のオンラインサロン

日時 11月19日(日)13時30分～14時30分
※会員限定のオンラインイベントです。

田主誠 Museum of Dreams
—みんなくと歩んだ版画家の創作世界—

第2期 10月31日(火)まで
第3期 11月2日(木)～28日(火)

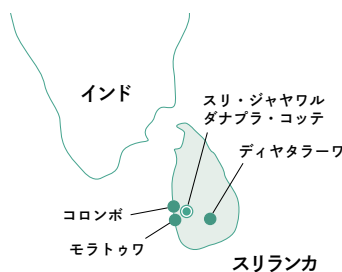
会場 本館1階エントランスホール
※観覧無料

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



再会——四年ぶりのスリランカ

中村 沙絵
東京大学 准教授



移ろいゆく風景と顔ぶれと

スリランカでは、新型コロナウイルス感染症拡大とこれに続く深刻な経済危機の影響で、多くの人たちの生活が一変した。路上では採め事が日常茶飯事で外に出るのも怖い——燃料や生活必需品が入手困難になった二〇二三年春、あ

る友人はそう言った。まっ先に頭をよぎったのは、お世話になっていた老人施設のこと。身寄りのない高齢者の死を看取る場でもある。わたしは大学院在籍時、この地域に固有の福祉と、施設での老病死・ケア実践に関する研究のため、そこで滞在調査をさせてもらっていた。今年に入り、状況が少し収まってきた

ので、再訪を思い立った。空港に着き、コロンボから幹線道路を南下する。道路沿いに建つ老人施設をすぐに見つけられなかったのは、門の傍らで枝葉を伸ばしていたティークの木や、アーチ形の門がなくなっていたためでもあるだろう。移ろいゆく



経済危機で物価が高騰したスリランカでは、生活費を抑えるため家庭菜園で野菜を作る人、自分で肥料を作る人も増えているようだった(ピリヤンダラ、2023年)



今はなき、大きなティークの木とアーチ形の門(モラトゥワ、2009年)

風景に時の経過を感じる。けれども、その移ろいのなかに、例えば「あの子どもがもう母親になって……」などといった連続性を見いだすのは、ここでは難しい。当時の入居者は多くが亡くなられた家族の元に帰るかしており、残っていたのは(一八八人中)わずか四人。住み込みスタッフの多くは未婚女性で、結婚したら施設を出ていくのが通常なので、当時の見知りは一入だった。調査当時(二〇〇七―二〇一〇年)はSNSもそこまで普及していなかった。だから別れは「次いつ会えるかわから



老人施設での食事の風景。スリランカでは、多くの老人施設が寄付によって運営されている。有志の人びとが誕生日や両親の命日などに追悼供養を兼ねて食事(あるいはその費用)をもちよる(モラトゥワ、2009年)

ない」という意味で、本当の「別れ」だった。博論執筆後も訪れてはいたが、施設を去った人たちにはほとんど会えていなかった。四年ぶりの来訪を思い立ったとき、わたしはあそこで苦業をともにしたスタッフたちに会いに行こう、と心に決めていた。人によつては、じつに二三年ぶりの再会だった。

アッカに会いに行く

ここではひとつの再会についてだけ。コロンボ郊外から車で揺られること六時間。軍のキャンプから月に一度だけ帰るといふ夫と二人の息子、義母や姪と暮らす一人のアッカ(シンハラ語で「お姉



あこのころはいつも10時に、アッカは薬を配っていた(モラトゥワ、2009年)

さん)を訪ねた。

じつはずっと気になっていたことがある。わたしのなかで瞬間冷凍されているフィールドでの場面——多くの場合、入居者の方々の最期にまつわる——がいくつもあり、ふとした瞬間に顔を出して心が疼くのだが、これはわたしが日誌を読み返して文章を書いたり話したりしているからなのか。それとも二十代という若さで人の生死の剥き出しの姿に繰り返し立ち会った経験によるのか。例えばあの場にいた彼女たちにとつても、今でもときおり「疼く」ののだろうか、といったことだ。

アッカの家は、ところどころに茶園が広がる、高地で冷涼な集落にある。井戸での水浴びは厳しいかな、と言いな

ら、わたしは井戸へと山道を歩

出会いは夢のあと

水田から野菜畑に変わったという谷と、周りにせり立つ山々に囲まれて、わたしは当時の看取りの話をした。彼女が知らないこともあれば、彼女の方がわたしより鮮明に覚えていることもあった。わたしの知らないアッカの余聞に

き、水浴びはせずに井戸の淵に腰かけてしばらく話した。暇さえあれば小説を読んでいた「本の虫」だった彼女は、母親になって文字への欲求がパタッと消え、自分でも別人になったようだ、と言った。また「子どもにあまり腹を立てないのはきつとあの施設で鍛えられたから」「年老いた母に薬を渡すとき、わたしはまだ薬を配っているのかと思う」などと笑った。その姿に、アッカがアッカらしく堅実に歳を重ねてきたことを思う。同時に、あの施設で身に染みついていた何かがあると顔を出してしまふ暮らしの質感のようなものに、妙な親近感を覚えてしまう。

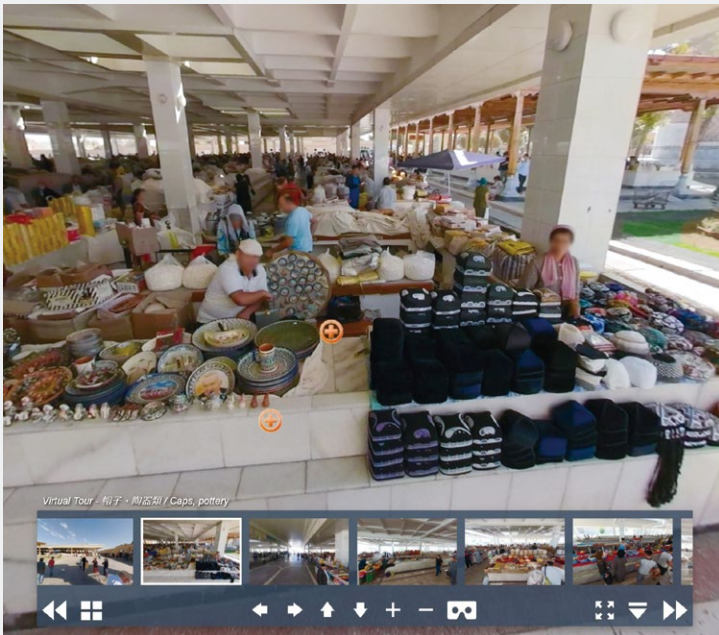


アッカと、息子たちと、茶園のなかを歩く(ディヤタラワ、2023年)

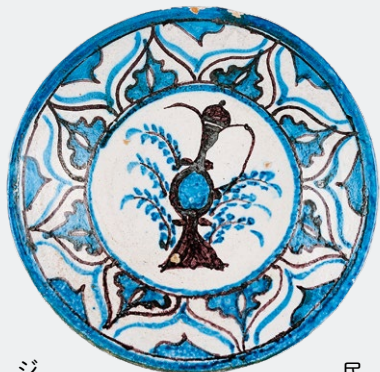


スタッフ、入居しているおばあさん、子犬が中庭で遊ぶ(モラトゥワ、2009年)

なつかしい人に会って来ました



左は「パノラマムービーから検索」の画面。オレンジ色の+マークをクリックすると、類似する民博収蔵資料の検索結果一覧ページに飛ぶことができる。下は検索でヒットしたウズベキスタンの飾り皿 (H0106198)



この三つのわけ方は、民博の中央・北アジア展示場のわけ方に沿ったものだ。そのなかで、筆者の専門地域である中央アジアのウズベキ

では、その広大な対象地域を中央アジア、モンゴル、シベリア・極北の三地域にわけて構成した。

ウズベキスタンのオアシス都市サマルカンドのバザール(市場)をそぞろ歩けば、商品を売り買いする人びとの喧騒とともに、野菜・果物や香料、食肉類などの食べ物から、色とりどりの衣服や日常生活用品にいたるまで、さまざまな魅力的な品々が目に飛び込んでくる。そうした「場」の雰囲気というものは、本来であれば現地に足を運ばないと味わえないものであるが、仮想的にはあるものの現地を歩いている

バザールで標本資料をクリックする!?

てらむら ひろふみ
寺村 裕史 民博 准教授



バザールのスイカ売場で撮影している様子(ウズベキスタン、サマルカンド、2018年)

中央・北アジア物質文化資料

資料点数：5,037点
民博が収蔵している中央・北アジアの物質文化に関する標本資料のコレクション。中央アジア、モンゴル、シベリア・極北という地域ごとにまとまった3つのコレクションを統合しデータベース化している。フォーラム型情報ミュージアム「中央・北アジア物質文化資料データベース」にて公開。
<https://ifm.minpaku.ac.jp/cnasia/>



男性用帽子
(ウズベキスタン、H0277489)



バラの花をつけた老人の人形
(ウズベキスタン、H0127679)

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

るように見て回ることができるヴァーチャルツアーのしくみを活用し、実際のバザールで売られる商品を見ながら類似の民博収蔵品について知ることができるという実験的な取り組みもおこなっているのが「中央・北アジア物質文化資料データベース」である。

広大な大地を網羅

民博には、中央アジアや北アジアで収集され

タンにおいて、標本資料のデータベースと現地のバザールで実際に売られている品物をヴァーチャル上でリンクさせる試みをおこなった。

マルチメディア・コンテンツの活用

データベースでは、フリーワード検索の際にどのコレクションから検索するかをチェックボックスで選択できるようにしたほか、項目別検索や、資料名・民族名から検索する機能も備えている。そして本データベースの最大の特徴は、関連するマルチメディアの情報にもアクセスできるしくみを用意したことである。

具体的にマルチメディア・コンテンツの詳細について見ていこう。

まずは、すでにオンライン公開済みの中央・北アジア関連の『月刊みんぱく』の記事(PDF)へのリンクを用意したコンテンツ。そして「民家模型(タシケントの民家)」の青焼き画面をスクリーンングし、デジタル画像としてデータベース内で閲覧可能にしたコンテンツが挙げられる。それに加えて特筆されるのが、先に述べたヴァーチャル・ツアーの技術を活用した「パノラマムービーから検索」である。

三六〇度全方位を撮影できるカメラを使って、サマルカンドのバザールの「三六〇度パノラマムービー」を編集・制作した。ムービー内に写り込んでいる品物をクリックすると、民博の標本資料のなかから同様のものを見ることができ。これは、資料名などから検索するのではなく、実際に現地で使われて(売られて)いる品



映像作品を仮編集段階で現地の人と一緒に確認する筆者
(撮影：岡部望、ウズベキスタン、2019年)

物のなかから類似する民博収蔵資料を探す、いわば逆引きの発想である。

もし民博に類似の資料が収蔵されていなくとも、純粹にヴァーチャルツアーとして周囲を見回しながら、まるでウィンドウショッピングをするようにバザール全体の様子や売られている品々を眺めつつ仮想空間内を移動していくだけでも楽しいだろう。

また、余談ではあるが、三六〇度カメラを頭上に掲げバザール内を歩き回りながら撮影しているときに、「YouTuberの方ですか?」と撮影スタッフが声をかけられた(それも日本語で!)。そういう風に見られるのも時代の流れだなあ、とは思ったが、さすがにYouTubeで公開していない。データベースを実際に使ってみていただくか、あるいは、現地の協力者がバザールで買い物をする様子に音声解説を加え別途制作した映像作品「オアシス都市のくらしーウズベキスタン・サマルカンドの食文化」(五八分、番組番号7250)が、民博館内のシアタールームにおいて公開されているので、ぜひそちらをご覧ください。

文化は輪廻する

菅瀬 晶子

民博准教授

てに魅了されたのだ。ここから映画をめぐる、少年の冒険がはじまる。貧しい村で生涯を終えたかもしれない彼は、映画を知ったことで果てなき世界へと飛び出してゆくのだ。

少年の映画狂時代

また映画を観たい一心で、学校をさぼって映画館に潜り込もうとするが、当然見つかってつまみ出される。そのときサマイに助け船を出したのが、映写技師のファザルだった。母親が持たせてくれるサマイの弁当と引き換えに、映写室への出入りをお目こぼししてやろうというのだ。こうして弁当を介して、サマイとファザルの共犯関係がしばらく続くことになる。サマイはヒンドゥー教徒、ファザルは名前前でわかるとおりムスリムのだが、二人は年齢も宗教も関係なく、映画で結び付き、絆を育む。のちにファザルが苦境を迎えたときは、サマイが救いの手をさ



DVD「エンドロールのつづき」
発売・販売元：松竹
※2023年11月時点の情報です

ブルジョワのおもちゃ？

映画とは、所詮ブルジョワのおもちゃではないか。友人にそう言われて、映画好きとしてはショックを受けたことがある。映画一本の鑑賞料は二千元、すっかり貧しくなってしまった日本人にとって、これはかなりの出費だ。映画をつくるにも莫大な資金がかかり、確かにすくなくとも日本にいる限り、持たざる者には縁遠い存在かもしれない。

しかしながら、今回とりあげる「エンドロールのつづき」は、それを否定する映画である。主人公である九歳のサマイが暮らすのは、インド・グジャラート州の片田舎。放課後には父親を手伝い、鈍行列車しか止まらない駅のチャイ売りをして、苦しい家計を助けている。そんなサマイ少年の人生は、ある日連れて行ってもらった映画館で一変する。活劇、きらびやかなダンス、暗闇にさす一条の光が映し出す別世界。映画という存在すべ

しのべている。

しかしながら、それも長くは続かない。映画館の支配人に見つかって出入り禁止をくらっても、熱は醒めやらない。サマイは友人たちを巻き込み、駅に保管されていたフィルムを盗み出し、映写機をなんとか自作して（！）自主上映しようと奮闘するが、フィルム盗難はすぐに露見してしまふ。ついにサマイは少年院にまで入れられてしまうのだが、それでも彼は映画を求めてやまない。出所後はついに、自作の映写機で上映会を実現する。

ところがこのころ、映画の世界は大きな変遷を迎えていた。映画館での上映はフィルムからデジタルへと移行し、ファザルは職を失う。運び出された映写機とフィルムが積まれたトラックを、サマイは友人と必死に追いかける。その後に続くシーンは衝撃的だ。トラックが着いた先で、映写機は無残にプレスにかけられ、溶かされて、スプーンへと再生される。セルロイドのフィルムもまたどろどろに溶かされた末に、どぎつい原色のプレスレットに加工される。この一連の工程を、サマイはこわばった表情で、無言で見つめる。焦がれてやまぬ映画が、それを理解しない者たちの手で破壊され、つまらないものへと姿を変えられてしまふ。映画ファンであれば誰もが目を覆いたくなく

フィルムの転生

る光景であり、当然サマイの絶望も深い。映画狂時代から一変して、うつろな目でおとなしくチャイ売りの手伝いに戻る息子の姿を見て、両親は心を決める。賢いこの子には、もっと高い教育を受けさせ、世界へ羽ばたかせてやったほうがよいと。

家族や友人、彼の賢さを評価していた学校の先生、そして彼の助けで再就職を果たしたファザルに見送られて、サマイは街へと向かう列車に乗る。そこで彼の目に飛び込んできたのは、着飾った女性たちが誇らしげに身につけているたくさんのプレスレット。卑俗なものにおとめられてしまったかみにえた映画は、姿を変えて人びとの喜びのために存在している。この文化芸術の輪廻ともいえるべき描写は、輪廻が当然のこととして宗教的に根付いているインド映画だからこそ、可能なのだろう。輪廻を否定するキリスト教徒やムスリムに囲まれて調査する身としては、このダイナミックな表現がうらやましくて仕方がない。

じつはこの映画、監督のパン・ナリンの幼いころの体験をもとにしている。映画に魅入られた少年は世界へ羽ばたき、今は多くの人の心を動かす映画を撮っている。これもまた、文化の輪廻といえよう。



サマイはファザルから、映写のしぐさを教わる（「エンドロールのつづき」より） ALL RIGHTS RESERVED ©2022. CHHELLO SHOW LLP

「エンドロールのつづき」

原題：Last Film Show
2021年/インド、フランス/グジャラート語/112分/DVDあり
監督：パン・ナリン
出演：バヴィン・ラバリ、バヴェーシュ・シュリマリ、リチャー・ミーナーほか



街のチャイの店。チャイは人びとの生活になくならないものである（撮影：島村一平、インド、ヴァーラーナシー、2017年）

剛、彭、楨、平、婉

すが ゆたか
菅 豊

東京大学東洋文化研究所 教授

中国語は、一つの漢字が単音節であるため、意味がまったく異なる同音異義語が非常に多く存在する。そういう異なる意味の漢字が同じ発音、あるいは類似した音をもつ状態、あるいは関係性を「諧音」という。中国の人びとはこの諧音を利用して、日常生活のなかで頻繁にことばの意味転換を楽しんでいる。それはいわゆる「語呂合わせ」であり、中国の常識である。また諧音は、中国文化を基底から支える想像力の源泉であり、その言語技法を知らずして、中国の奥深い文化を十分に理解することはできない。

十数年前、友人の陳さんと徐さんの家族と一緒に食事をしていた。突然、陳さんはわたしに「ここにいるわたしたちの家族の姓名には、ある共通点があるのですが、わかりますか？」と尋ねた。そこには陳剛さんと彼の妻・彭樹さん、息子・陳楨さん、そして徐百平さんと、彼の妻・陳婉さんの五人がいた。わたしは、彼ら彼女らの名前を思い浮かべながらしばらく考えたが、まったくわからない。わたしが諦めたのを見計らって、陳さんは嬉しそうに答えを教えてくれた。答えは、五人の名前は、すべて「器」に関連するのだという。そこでわたしは、再度その名前を思い浮かべてみたが、どこにも「器」に関係する文字は見当たらない。いつまでも悩んでいるわたしに、いささかもどかしくなった陳さんは、種明かしをしてくれた。それは、漢字そのものではなくて、漢字の発音に秘密があるのだという。姓名に含まれる漢字が、諧音によって「器」を連想させるのである。

例えば、陳剛さんの名前「剛」の発音はピンインで書くと gāng で、その発音は甕を意味する「缸(gāng)」と同じである。そのように考えると、彼の奥さんの姓「彭(péng)」の音と、鉢を意味する「盆(pén)」と音がよく似ているし、息子の名

前「楨(zhēn)」の発音は、酒や茶を「注ぐ」という意味の「斟(zhēn)」と同じで、そこから酒壺(德利)や酒杯が思い浮かぶ。また、徐百平さんの名前に入っている「平(píng)」は、ピンの意味の「瓶(píng)」と同音で、奥さんの名前「婉(wǎn)」は、お碗の「碗(wǎn)」と同音である。つまり彼ら彼女らの名前に含まれる剛、彭、楨、平、婉という漢字は、諧音によって缸、盆、斟、瓶、碗といった「器」に関する漢字と共通点をもつ仲間として認識することができるのである。

この諧音を利用した語呂合わせは、ちょっとしたことば遊びであるが、中国では日常のジョーク以外に、絵画などの芸術や工芸、民間の信仰、車のナンバープレートや電話番号の選択、商品の命名などの経済活動、そして直接語ることが難しい政治風刺などのシリアスな場面でも広くおこなわれ、人びとの思考や行動に影響を与えている。

諧音を用いる語呂合わせは、当意即妙に意味内容を変換する機知である。もしあなたが、状況に応じて諧音をうまく駆使し、ある漢字を軽妙洒脱けいみょうしやうだつに別の意味へと変換することができたならば、周りの人びとは、あなたの頭脳めいせきの明晰さをきっと褒め称えてくれるだろう。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年11月号

第47巻第11号通巻第554号 2023年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 櫻永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
11月号

編集後記

今月号を編集しながら、こんなことを考えた。

資格などが必要なければ自分の職業をどう名^な告ろうと勝手だが、ひとたび罪でも犯そうものなら「自称〇〇」なんて書かれ方をして、まるでニセモノ扱いされる。この扱いには社会的信用の失墜が含意されている。ニセモノには信用がないのだ。

逆にいえば、ホンモノを^{りようが}凌駕しているようなニセモノはホントにすごい！ 実力は「ホンモノ」以上だからだ。だが、そういうニセモノほどホンモノにとって迷惑な存在はない。少年時代、手塚治虫作品のブラック・ジャックには魅せられたが、もしあんな天才外科医が実際にいたら、社会の側があらゆる手を尽くして彼を排除するだろう。ホンモノの医者の権威ばかりでなく、それにオ墨付きを与えている国家の権威までコケにされているわけだから。

そう考えると、ホンモノをめぐるの対立とは権威をめぐる闘争なのだろう。今もむかしも至るところにはそれはある。だが、ホンモノがあってニセモノがあるという単純な二元論自体がもうとっくに通用しなくなっている。昨今のAIの発達によって改めて気づかされたのもそのことだった。(櫻永真佐夫)



次号の予告 12月号

特集「よみがえるゼナドス・ケス」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

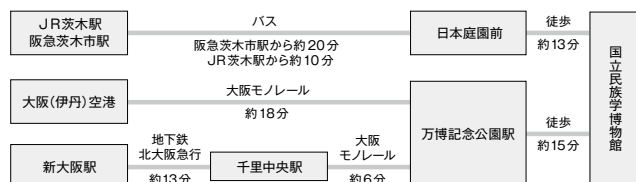
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



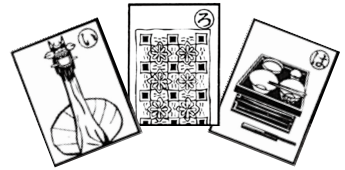
みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ オリジナルグッズのご案内

現在、国立民族学博物館で開催中の特別展や企画展、版画展のオリジナルグッズをご用意いたしました。みなさまのご来館をお待ちいたしております。



仮面手拭

みんなくみ集められた世界の仮面がデザインされた手拭(てぬぐい)です。

サイズ: 約90cm×35cm

定価 **1,200円**(税込)

民族学いろはがるた キャンパスバッグ

版画家、田主誠さんの作品「少年少女のための民族学いろはがるた」をデザインしたトートバッグ。絵札はすべてみんなくの収蔵資料です。

サイズ: 約35cm×36cm(ハンドル、マチ含まず)

定価 **2,500円**(税込)



書籍

『版画家 田主誠の世界』

世界の民話、民族博物誌、国内外の旅の風景……。みんなくみから広がった夢の足跡をたどる版画文集。

発行: 編集工房is
B5判 本文84頁(カラー)

定価 **1,760円**(税込)



2024年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

ミュージアムで 世界と出会う

創設50周年を記念して、常設の本館展示から選びました。みんなくの研究者たちが50年かけて収集したモノをとおして、世界と出会ってみませんか。

サイズ: 25cm×25cm(開くとタテ50cm×ヨコ25cm)
オールカラー 28頁 中綴じ

定価 **1,430円**(税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 **1,287円**(税込)

◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊**1,144円**(税込)です。

◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。



2023年7月から、オンラインショップで Amazon Pay(アマゾンペイ)が使えるようになりました。

ただし、国立民族学博物館友の会会員の方の会員割引につきましては、Amazon Pay をご利用の場合は適用できませんので、あらかじめご了承ください。友の会会員割引の適用を希望の場合は、会員番号をお知らせいただくとともに、お支払い方法を郵便振替・銀行振込を選択して、お申し込みください。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ E-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」 <https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ